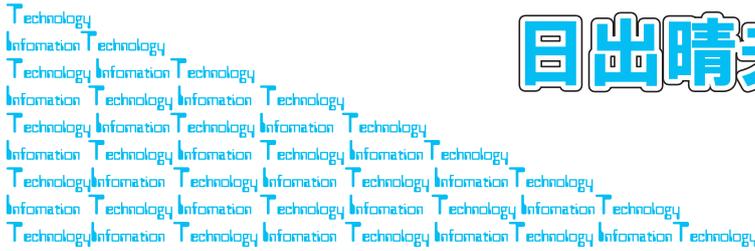


# いな話

## 日出晴夫の



日出 晴夫

中小企業診断士。阿南市在住

<http://www.facebook.com/haruo.hinode>

### お盆とお彼岸

本年も例年に倣って、お盆という先祖祀りの頃が過ぎました。

年中行事になった「お盆」ではありませんが、やや気になりますので調べてみました。少し長くなりますが、仏事百科より引用してみます。

\*\*\*\*\*

お盆とは正式には【盂蘭盆】といい、古代のインド語の一つであるサンスクリット語の「ウランバナ」を漢字にあてはめて読まれた言葉です。お釈迦様の弟子の目連は、母親が死後の世

界で餓鬼道に堕ちて飢えに苦しんでいる姿を見て、お釈迦様に母を救う方法の教えを請いました。その教えに従って、布施や供養を僧侶や多くの方々に施したところ、その功德により母親は極楽浄土に行くことができました。それ以来、目連が多くの人に施しをした旧暦の七月二日は先祖供養の大切な日となったと伝えられています。

また一方中国では仏教以前から死者への祖霊の儀式もありました。これらが一緒になって日本に祖霊信仰として伝わってきたとも言われます。お盆の時期お寺では「盂蘭盆会」という法要を執り行います。各家庭ではお盆には故人の霊が帰って来るといわれ、お供えや提灯を飾ってお迎えます。

\*\*\*\*\*

分かったようで今一つ、明確な説明とは思えません。私達は、宗教的には仏教徒に分類されているようですが、仏教自体が伝来のものであるとすれば、私達の根

本、ルーツは一体、どんな所にあるのでしょうか？ともすれば、自分自身の深層心理との会話をしてみたくなる日々が続いています。こんな心理を埋めるものとして、かつては日本文化論がありました。こわい話ではありませんが、単純で魅惑的な論理でもあります。

これらの議論が飛躍すれば、曰く付きの皇国史観へも発展しかねません。対するに科学的史観を謳い、歴史的發展論を展開していた若かりし頃が懐かしくも思える日々です。

年齢を重ねるにつれ、やや趣も変わりつつあるようです。季節の変化の節目には先祖の墓の前に立ち、越し方・行く末に思いを馳せる…そんな機会も今後は増えて行くことでしょうか。

九月の行事としては、秋分の日という国民の休日があります。この日は「お彼岸」ということで、「お盆」と同様に、先祖墓のお詣りにも出かけられる方も居られるでしょう。

しかしながら、よくよく

考えてみると、案外、よく分かっていないものなのです。「お彼岸」、一体、どんなものなのでしょうか？

彼岸とは、煩惱を脱した悟りの境地のことです。煩惱や迷いに満ちたこの世をこちら側の岸「此岸」と言うのに対して、向う側の岸「彼岸」という…という程度は知識はウィキペディア等で得ることは出来るのですが、それから向こう側は、異次元空間ということなのでしょう。か？まさに人生いろいろです。今後も、このような話題も取り上げたいと思っております。

### 生きること。死ぬこと。

このコラムでは、ITに係る話題、中小企業施策に関わることに他に、個人的な趣味である観劇（市民劇場）のことを取り上げて来ています。

早いもので、市民劇場へ再入会して七年が過ぎています。継続的な観劇活動は、一個の思い出作りの手段ともなって日常生活に密着し

図①；市民劇場：2016年9月例会ポスター

松金よね子 岡本麗 田岡美也子 大谷亮介 酒向芳 本間剛

俺も、言うか言うまいか、  
ずいぶん迷った。

八百屋のお告げ

グループら・ばら vol.23  
鈴木聡 木野花

★あわぎんホール 舞土文化会館  
9/17(土)夜6時半  
9/18(日)昼1時半

★鳴門市文化会館  
9/16(金)夜6時半

徳島市民劇場

TEL 088-653-1752  
FAX 088-653-1755

たものとなつています。ここで紹介する九月例会は、喜劇風ではありますが、生と死に正面より立ち向かった作品のようでここで紹介したいと思います。(図①)

担当の劇団は「グループら・ばら」、11年8月の「片づけたい女たち」以来の舞台となります。

「八百屋のお告げ」と題したこの舞台の主なキャストは、松金よね子さん、岡本麗さん、田岡美也子さん(図②)です。おそらく、笑いの止まらない舞台となることは、間違いないでしょう。

しかし乍らと言うべきでしよう。この作品のメインテー

マは「死」なのです。少々、粗筋を見てみます。

\*\*\*\*\*

占いがよく当たると評判の八百屋さんから、今夜11時に死ぬとお告げをされた多佳子。

訪ねてきた親友の真知子と邦江に不安を打ち明け、

図表②；「八百屋のお告げ」メインキャストینگ。三人の美女。



その時を一緒に過(こ)してほし  
いと頼む。いきなり現実味を

帯びた「生と死」という問題に、真剣に向き合い始める3人。居合わせた男性たちも巻き込みながら、刻一刻とタイムリミットは近づいてくる……

\*\*\*\*\*

実際の脚本も見えてはいますが、二年前の「女たち」の見事な台詞の応酬を思うに付け、旧来の新劇風の世界を超えた舞台として期待満々で迎えたいと思っております。

また、この作品は、06年初演ですが、12年の再演では横浜や甲府のほか、震災後の東北全県を巡演し、命と正面から向き合う姿を描いた喜劇として、多くの共感を得たことでも知られています。生死観に惑いのある方、必見です。

再生可能エネルギーの話

本来は、前月号に引き続き、技術ネタを綴る予定でしたが、急遽、変更しました。「企業情報とくしま」に合わせ、10月号に掲載させていただきます。御期待下さい。